

自然農法創始者の言葉

「時期を待て」

岡田茂吉（1882—1955）
幼少期からの数多くの病気体験を通して薬が人体に及ぼす害に気付くとともに、浄霊法・自然農法・芸術によって人類救済と病貧争のない世界の実現を目指し、様々な活動を展開した。

る。というのは最初事に当たる場合充分計画を立てて、遺憾なく準備をしてかかる。ではあるのが、さてやってみると予期通りにゆかないばかりか、思いもかけない邪魔や障碍が起るるので、ご当人もその判断に苦しむこととなり、前途が判らなくなるというの

社会各方面を備に観察するとき、失敗者のあまりにも多いことである。ところが失敗の結果として、ご当人だけの苦しみなら、やり方が悪いとか運が悪いとかいつて諦めてしまえばそれで済むが、実はそれだけでは済まない。ではなにかというと、一人の失敗が家族を路頭に迷わせたり、親戚知人にまで迷惑を及ぼすということになるから、一種の社会悪を構成することになる。つまり最初の出発は悪意ではなかったことは勿論であるが、結果からみてそうなる以上、軽々に看過できない問題である。

右のごとくである以上、失敗者のその原因を深く検討する必要がある。その結果あまり人々の気のつかないところに、その原因を見出すのであ

る。というのには、夏から秋に美しい花が咲くのである。果実にしても熟す時期は決まっている。熟さないとき採っても食うことはできない。充分熟したときに採ってこそ、美味な食物である。農作物にしても、種まきや移植等すべて適期がある、勿論風土気候にも適合しなければならぬ。

右は一言にしていえば時期ということは無視するからである。人事百般この時機ほど絶対的なものはない。例えばあらゆる花卉や果物にしても農作物にしても、すべては時期がある。時期に合わないれば他のことはいかに好条件であったても良成果を挙げることはできない。秋季草花の球根を埋めるから春になって花が咲く。春種を蒔き球根を植

えるから、夏から秋に美しい花が咲くのである。果実にしても熟す時期は決まっている。熟さないとき採っても食うことはできない。充分熟したときに採ってこそ、美味な食物である。農作物にしても、種まきや移植等すべて適期がある、勿論風土気候にも適合しなければならぬ。

以上のように、大自然は人間に対し、時期の重要性を教えており、大自然のあるがままの姿こそ真理そのものである。したがって人間は何事をするにも大自然を規範としなければならぬ。それに学ぶことこそ成功の最大条件である。この意味において、私が唱える神霊療法も無肥料栽培も、その他の種々の方法にしても大自然に従うことを基礎としているから、ほとんど失敗はなく予期の成果が得ら

れるのである。故に私はなにかを計画する場合決して焦らない。充分多角的にあらゆる面から客観し、熟慮に熟慮を重ねいかなる点からみても正しく、社会人類のため有益であり、永遠の生命あることを確認し、しかる後準備万端を調え時期を待つのである。ところが大抵の人はこの時を待つ辛抱がなかなかできない。

時期未だ熟していないのに着手するから計画と時期とにズレを生じ思うようにゆかない、あせる、ますますズレが大きくなる、ついに失敗する——という順序になるのである。したがって肝腎なことは時期来るまでの期間の辛抱である。物には必ずちようど好い時があるものだ。昔から「待てば海路の日和あり」とか「果報は寝て待て」とか「狙い打ち」とかいう諺があるが、まっ

たくその通りである。

ところが右のような私のやり方に対し非常にまだるがる人が以前はよくあった。また種々の献策や希望をいう人もあったが、私はそれらを採用すべく約束してもなかなか実行に移さないので焦れたり不思議がる人もよくあった。私としては、時期が来ないから手を出さないまでである。昔から「チャンスをつ掴め」とか「風雲に乗る」とか「機会を逸するな」とか「理を言葉もあるが、よくこの理を喝破している。しからばその機運というものは何によって判断するのか」と、まずあらゆる条件が具備し、機運からみてどうしても計画を実行しなければならぬという勢いが進むようになる。そういうときこそ機が充分熟したのであるから、着手するや少



しも無理がなく、楽々すべてが運んでゆく。そういうわけですさらに力が要らない、自然にうまくゆく。要するに熟慮断行の四字に尽き、例えば重いものを坂から落とす場合、悶えているものがある。それを無理に動かそうとすると力が要る。そこを我慢して待っていると、障害物が石の重みでだんだん弱ってゆく。もう一息というとき指一本で押すとわけなく転がるようなものである。「鳴かずんば啼くまで待とう時鳥」とは家康の性格を諷したのであるが、彼が三百年の命脈を保ったのも、まったく時期を待つという、そのためでもあった。

以上によって、時期なるものがいかに重要であるかを知るのであるう、大本教祖のお筆先に曰く「時節には神も敵わぬぞよ」とあるが、一言に喝破しえて妙なりというべきである。

〔光〕 十四号

昭和二十四年六月二十五日

岡田茂吉全集

著述篇 第7巻より



自然農法を理解するためのキーワード

育土 ～土が育つ時間～

普及部 岩石 真嗣

自然農法は「土の偉力を発揮させる」ことを原理とする。一般的に土壌を中心とした生物の生育空間を土壌圏といい、農地の土壌圏と生物を合わせた空間を耕地生態系という。ここでは、生物を含む耕地生態系を「土」と呼び、土が自ら育つのを手助けする方法を「育土」と呼ぶ。生きものは「土」を中心とした循環の輪の中にあつて、土が育てば作物が育ち、作物が育てば人が育ち、人が育てば土が育つ。この育土の循環を時間をかけて進めることによって、生態系の健全性は保たれ、その生命の循環から適正な活力が生み出される。

かつて、古代文明は土を軽視し、自ら土を失い、作物を失い、国を失って滅びた。私たちがその歴史に学ぶべきことは、土を慈しみ、土を育てることにあつた。作物が根を張れる土（作土）が1cmできるのに100～1000年の歳月が必要と言われている。この土を地球上の陸地表面に置いてみると、たった18cmの厚みにしかならない。しかもこの尊い作土は肥料による汚染や砂漠化の進行によって減少している。土壌腐植（humus）を語源とする人類（human）は、土に対する謙虚さ（humility）を取り戻さなければならない（陽捷行『18cmの奇跡』三五館・2015）。

自然農法30年の研究の結果、土を育てることで栽培が楽になることが分かった。有機物の発酵施用によって土壌構造が発達し、土は見かけ上の厚みを増し、保・排水性が改善する。この厚みは1年を通して増減するが、水田では10年単位で数mmの増加が認められ、水稲収量の増加も期待できた。一方、不透水層に到達した水稲根の根穴が排水性を改善し、多年生雑草の塊茎繁殖を抑えて除草を容易にし、水稲収量も増加した。一般的に有機物施用は施肥の代わりとして行われることが多いが、育土の観点からすれば、土壌腐植を増やし、作土の厚みを増し、保・排水性を確保する土壌構造の発達を目的とすべきである。そしてそれには土が育つための時間が必要である。

5年間のキャベツ栽培試験では、ライ麦の裏作と浅い部分耕耘とわずかな有機物の発酵施用によって育土を続けた所は、全面耕耘し化学肥料や農薬を使った所に比べて、土壌構造が発達させる土壌腐植が増加し、保水性が高まり、土壌の養分供給能力が増加してキャベツが充分結球するようになった。と同時に、土壌動物とそれらを餌とする天敵が増加した。育土を続けることで耕地生態系が安定し、キャベツの生育量が増加するとともに、病虫害が明らかに低下する傾向が確認できたのである。

また、慣行栽培から切り替えて自然農法水稲栽培が安定するために5年程度の期間が必要であった。全国的に見ても転換3～4年目に雑草が増加し、水稲生育量が低下する現象が複数箇所で見られた。また、キャベツ栽培でも慣行栽培から切り替えて3年目にキャベツの生育量は一度低下し、雑草が優先する年があつた。こうした慣行栽培から自然農法に切り替えたときに、一時的に栽培が難しくなる状態は「転換期の壁」といえる。有機JAS規格の転換期間2年の経過後に、いよいよ認証が得られる時期になってこの転換期の壁にぶつかり、農薬の再使用を余儀なくされる事例がある。

今後の研究の進捗によって、育土にかかる期間を短縮し、「転換期の壁」を容易に乗り越える技術化が成立すれば、自然農法は持続的な農業へと変わるだろう。